

授業記録から大学生の教師観を探る

－実習前の教職課程科目履修者を対象にして－

西迫 貴美代¹ 今村 久雄²

I はじめに

2018年度、2019年度の2年間、筆者はK大学³（体育単科四年制大学）において教職課程の科目「教育方法・技術」の非常勤講師を務めた。科目開設は後期集中講義という依頼である。2018年度は日程調整がうまくいかず、週末土・日と次の土曜日、つまり一日5時間の三日間で実施した。講義として成立させる努力はその「教育内容」は勿論であるが、その方法に集中せねばならない。しかし、初めての集中講義の過酷さに、正直余裕のない状況で終了した。次年度は同じく集中講義方式で実施するが、履修学生にとっても講義者にとっても前年度より、良い条件を準備することを考え、講義日程を一日増やし、一日4コマとし、さらに教育実習前教育として、現場の体育教師の登壇をお願いすることにした。ゲストティーチャーをお願いするにあたっては、K大学教務課に相談し、承諾を得ることができた。また筆者の講義計画と意図・計画をゲストティーチャーと調整しつつ承諾を得て、実現することとなった。

なお、ゲストティーチャーの登壇については、約30年以上前より、体育科教育学をベースに実践研究を交流している全国規模の体育実践研究会のネットワーク⁴に参加しており、第一著者自身が、第二著者である現場教師の長年の体育実践の実際や授業以外の教育活動（学校・学級経営）について周知していることが大きな要因である。また何より第一著者が現場教師の経験を教育実習前の学生に紹介することの意義を確信していることが背景にある⁵。

さて、本研究は、上述したように「集中講義」での実施のため、受講生約100名の授業記録は次の講義日までに確認して講義準備に生かすという点で大いに活用することができた。しかし、全ての講義を終え評価をする段階において、改めて量的な分析や講義者が見落としている内容を再点検する必要性を認識した。学生たちの教師観（体育）、教師観、教育観を探ることによって、筆者の教職課程科目講義の充実へとつながることを期待している。併せてゲストティーチャーとしてご協力いただいた第二著者の「学生の不安」に対する「回答」の姿勢には感銘を受けるとともに、教員養成に関わる大学関係者にとって、より「学生の実態」に接近できる貴重な資料になると考える。

1 鹿児島県立短期大学 生活科学科 食物栄養専攻所属 講師

2 元鹿児島県中学校教諭 鹿屋体育大学2019・2021年「生活指導論」、「教育方法・技術」ゲストティーチャー 現職中の主な著作：海野勇三・今村久雄（1988）「体育授業における技術指導と集団づくり－中学校50mハードル走の実践分析－」『鹿児島大学教育学部研究紀要第38巻』pp77-103. 他多数

3 鹿屋体育大学 教職課程科目

4 学校体育研究同志会1955年設立：<https://taiiku-doshikai.org/> 鹿児島支部所属

5 江藤真生子、嘉数健悟（2019）「体育科教師教育研究の動向－Tinningの理論的方向性による研究の分類から－」『体育科教育学研究』35(2),pp1-16. 現段階ではTinningの4つのパラダイムの中のいずれに方向性に分類されるのかには言及できない。教師の力量形成の過程を追求すること、さらに「教師になる」ことを目指す学生に対する現場教師のメッセージに大きな可能性を感じるという直感的確信にとどまる。本稿を足がかりにしたい。

II 本研究の目的とその方法

上述したように、改めて量的な分析や講義者が見落としている内容を再点検する必要性を認識した、「教員養成課程科目の担当者」と「ゲストティチャー」との振り返りの作業である。まず本講義を三つの段階に分ける。それは、学生に三つの問い（課題）を提示していることを手がかりに整理することとした。

第1時間目「これまで印象に残っている授業はどんな授業か？」という問いからスタートした講義から、**第10時間目**「ゲストティチャーへの質問：教育実習への不安など」さらに最後の**15時間目**「今、あなたがやってみたい授業を考えてみよう」の課題提示である。この三つの問いへの取り組みが残されている「授業記録」から、「学習者」から「指導者（教師）」の立場への意識転換にどれほど貢献できたかを明らかにすることが可能なのではという仮説を立てた。

そのための方法は、88名の15回分の授業記録から可能な限り数値的データにできる箇所を抽出し、そのデータと学生の記録を読み解く作業をまとめるという方法である。主観的なまとめにならざる得ない予測ではあるが、教育実習前履修の「学生の教師観」の変容にどのようなアプローチが必要か、今回の講義計画の妥当性を問うとともに今後の課題を導き出すことを目的とする。

改めて本稿をまとめるにあたり、以下の役割分担を確認しまとめることとした。

- 1) ゲストティーチャー講義までの授業展開（西迫）
- 2) ゲストティーチャー講義内容（3コマ）について（今村）
- 3) 「やってみたいこんな授業案」の課題について（西迫）
- 4) 成果と課題（西迫・今村）

III ゲストティーチャー講義までの授業準備と展開

1 ゲストティーチャー講義前までの講義者の到達目標とその実際

K大学（教務課）より、事前に提示された表1「教職課程コアカリキュラム対応表」を元に筆者は講義準備に入った。⁶

次に示す表2・3は表1を踏まえて、筆者が作成した講義（教科）計画と講義外（教科外）でのプランと課題提示である。実際の講義では、講義開始前に作成した講義内容の順番の変更を行なっている。

本講義の事前準備段階では、K大学との日程調整が主なものであるが、その他にシラバス提出と時間外の課題の設定、講義に使用する教室及び情報機器の確認である。さらに、ゲストティーチャー導入の説明と了解を得ることである。おおむね了解いただき、当日までの準備と手続きに関して、講義者の希望を可能な限り聞き入れていただけた。

さて、本稿の主たる目的ではないが、筆者の実践において、特徴的な実践である「非言語的コミュニケーション方法」（3・4時間目）について、説明させていただきたい（表2参照）。非常勤として講義し、しかも集中講義で実施する条件は学生にとっても良い条件とは言えない。約100名でワークショップとして実施することに踏み切るにあたって

6 提示された「教職課程コアカリキュラム対応表」から表1は幼稚園教諭内容を削除している

表 1. 教職課程コアカリキュラム対応表 (K 大学)

全体目標	教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）では、これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な、教育の方法、教育の技術、情報機器及び教材の活用に関する基礎的な知識・技能を身に付ける。	
(1)教育方法論		
一般目標	これからの子供たちに求められる資質・能力を育成するために必要な教育の方法を理解する	
到達目標	1)	教育方法の基礎的理論と実践を理解している。
	2)	これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育成するための教育方法の在り方（主体的・対話的で深い学びの実現など）を理解している。
	3)	学級・児童及び生徒・教員・教室・教材など授業・保育を構成する基礎的な要件を理解している。
	4)	学習評価の基礎的な考え方を理解している。
(2)教育技術		
一般目標	教育の目的に適した指導技術を理解し身に付ける	
到達目標	1)	話し・板書など、授業・保育を行う上での基礎的な技術を身に付けている。
	2)	基礎的な学習指導理論を踏まえて、目標・内容、教材・教具、授業・保育展開、学習形態、評価規準等の視点を含めた学習指導案を作成することができる。
(3)情報機器及び教材の活用		
一般目標	情報機器を活用した効果的な授業や情報活用能力を視野に入れた適切な教材の作成・活用に関する基礎的な能力を身に付ける。	
到達目標	1)	子供たちの興味・関心を高めたり課題を明確につかませたり学習内容を的確にまとめさせたりするために、情報機器を活用して効果的に教材等を作成・提示することができる。
	2)	子供たちの情報活用能力（情報モラルを含む）を育成するための指導法を理解している。

は、筆者の意図とこれまでの経験実績の説明が必要であった。一つには、筆者のさまざまな学習形態（方法）の模索の中で、学習者のそれまでの身体的表現の特徴を把握することは欠かせない。ゲーム的な出会いの中で、彼らの身体感覚を大いに刺激する方法を展開することで後半のグループワークにつなげる意図もある。その展開については、「コミュニケーションの方法にもさまざまな種類があることを再認識した」「自分は感情がわかりやすい人だということを知った」「雰囲気づくりの方法に活かせると思った」「初めて話す人とも話せてよかった」「体を使って人に伝える方法について改めて気づいた」「初めて接する人ばかりの中でゲームは不安だったけど、アイコンタクトやゼスチャだけでコミュニケーシ

表 2. 授業計画の実例

回	授業内容
1	教育の方法・技術とは（オリエンテーション）
2	学校づくりとカリキュラム（教育制度の歴史から）
3	非言語的コミュニケーション方法（ワークショップ）①
4	非言語的コミュニケーション方法（ワークショップ）②
5	学級集団の理解と指導①指導形態
6	学級集団の理解と指導②各教科の特色を考える
7	授業研究と教材研究をどうすすめるか①（体育の授業）
8	授業研究と教材研究をどうすすめるか②（体育の授業）
9	授業研究と教材研究をどうすすめるか③（体育の授業）
10	教育方法・技術の変遷（近代）①
11	教育方法・技術の変遷（教科）②
12	教育方法・技術の変遷（教科外）③
13	授業記録と授業案づくり（教育メディアの活用）
14	教育評価について（目標-内容-方法との関係）
15	学力と授業の変遷と教育方法論（学習指導要領の変遷）

ンを取ることができて楽しかったし、アイスブレイクにも使えると思った」「特に声が大切だと思った」という感想が多数あった反面、中には「意味がわからなかった」と困惑している感想もある（記載なしも含めて全体で12名）。参加は強制せず、学生の反応を観察しつつ進めるが、総じてこのワークショップの意図を考えながら参加している状況は作り出せたことを改めて確認できた。⁷

表3. 授業時間外の指導等(予習、復習、レポート等課題の指示)と時間数

No	内容	時間数
1	「教育方法・技術」科目の教職科目群の位置づけについて復習	1
2	「教育課程」と「カリキュラム」の概念の整理(歴史的背景) 教育学用語のチェック(教育学上の意味を把握)	2
3	「学校制度」の変遷を把握(時代の変化と教育方法の変化の関係)	2
4	「教科」の成立の背景について考える	1
5	「教科」以外の内容について考える(教科外)	1
6	ワークショップの意図を考える①	1
7	ワークショップの意図を考える②	1
8	ワークショップ①②の経験から「伝える」方法を整理(あなたの得意な「伝える」能力について考える)	1
9	教育方法論の基本的な理論の整理と各教科の特色から導き出される教育方法について整理(N04教科の成立について復習)	2
10	体育科教育(教科)の授業づくり①(競技スポーツと体育でとり扱う教材との違いを理解する)	1
11	体育科教育(教科)の授業づくり②(競技スポーツと体育でとり扱う教材との違いを理解する)	1
12	体育科教育(教科)の授業づくり③(競技スポーツと体育でとり扱う教材との違いを理解する)	1
13	No10~No13を参考に妄想授業案を作成する①	1
14	①の授業案をさらに実現可能なものへ修正する ②目標-内容-方法の関係を再検討	1
15	No14②の授業案から「評価」の観点を導き出す(教育評価の種類把握:形成的評価、到達度評価、絶対的評価、相対的評価、ポートフォリオ評価など)	2
16	本講義でどんな力が身についたか?自己評価をする	1

2 高校までの授業観, 教師観を探る

さて、第1回目講義は、「あなたの印象に残っている授業を教えてください」という問いからスタートする。図1は、改めて授業記録から読み取った印象に残った授業を教科別に分類した図である。K大学は体育系単科大学であることから、当初ほぼ全員が「体育」教科の回答ではないかと予測した。本データは講義終了直後に確認しその他の教科(内容で分類)の印象の記載に「教師像」「授業方法」が挙げられていることに筆者の予測が外れていることを確認し、本講義への関心へと引き寄せた。

1) 体育の授業、教師像の記載内容抽出

体育をあげている学生の記憶の多くは高校時代の授業が多い。進路指導とも関わって部活、担任の教師をあげている。「面白い先生」の説明には、指導方法がよかったという記載は、31人中8名であった。「先生の競技力が高い」「記録が伸びていくのが楽しい」「専門的な知識が豊富」「動作をわかりやすく指導」「苦手な人も思いっきり失敗を恐れずに思いっきりする雰囲気」をあげている。

その他「楽しい授業」と記載されている背景には、体育教科の特徴も読み取れる。それは、高校になると種目選択制の教育課程となっており、「自主的」「好きな種目」「ゲームで盛り上がった」「生徒主体で」という記載には、自由度が増したと感じていることがうかがえる。また好きな種目だけを選択する傾向があり、さまざまな運動文化に触れる機会は少なくなっていることが推察できる。

7 拙稿(2013)「教育課程編成から読み解く「身体教育」の位置づけの検討-教員養成系科目「自己表現法(身体)の実験的授業構想-」鹿児島県立短期大学紀要」第64号, pp19-39.参照

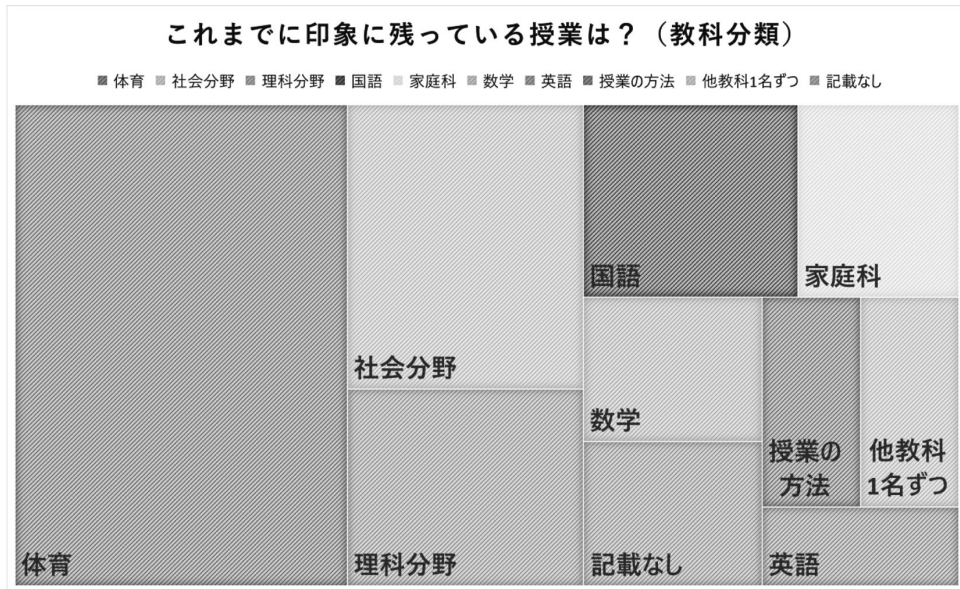


図1. 学生の印象に残っている授業

2) 体育以外の教科・教師像の記載内容抽出

体育の次に多い教科が社会分野（13名）である。その理由には「面白い内容」「体験談」「教科書通りではなくて教材の工夫」「グループ活動」「理解が深まった」という理由が記載されている。

次に理科分野（9名）は面白かった、楽しかった理由で一番多いのが「実験」である。国語（8名）では、「字がきれい」「深読み」「コミュニケーションをとる場面が多い」「プリントの工夫」「嫌いな国語が好きになった」である。小学校時期の「自分の意見を初めて言えた」という記載1名。国語教科の記憶は、小学校、中学校時期が多い。

数学（5名）は「学び合いという形式で一つの問題に対して、席を移動しながら教え合う」ことで「クラス全員の理解を目指す授業」であると記載している。

家庭・技術（6名）の多くは調理実習で男性が多い。男女共修の成果とも言えよう。その他は英語（3名）「アクティブラーニング」「プリントの工夫」「ALTの先生との交流」である。音楽、美術、道徳は1名ずつ。

また教科は表記していないが、思い浮かべた先生を分析し「授業は厳しかったけど普段はとても優しく熱意があった・ポイントポイントをしっかり伝えプリント配布も行ってた・最初の1回目の授業で全員の顔と名前を漢字で覚えていた・声が大きく授業に工夫がありこの教科が得意になった。記憶に残った先生は、ひとり一人に声をかけ生徒の意見も聞きながら指導を行っていた。共感してくれながら、ダメなことはいけないとメリハリのある指導をしていたので、生徒から信用されていたのでそんな能力を身につけられたらいい」と長文の記載も含め3名の回答がみられた。

始まったばかりの講義の問いに対して、「これまでの楽しい授業？なぜ？今の自分ではとても教員にはなれないと思うようになってきた。自分が教員を目指すと思った要因をも

う一度思い出して進路を考えたいと思う」と不安にさせてしまった記載1名については、講義中にフォローできていない。

学習者としての記憶を引き出し、さらに本講義で「教師という仕事」や授業づくりの一般的「方法・技術」に関する内容の理解と「体育教科」の特殊性について学び、教育実習前に「指導者」としての視点へ導くことがどれほど可能なのかが問われていることを自覚した次第である。

IV ゲストティチャーの講義内容

IV・Vはゲストティーチャー（第二著者）の自身の講義の振り返りについて述べる。第一著者は項の文頭にのコメントを付記し、二人の役割分担内容を補足する。

第二著者は2019年12月第一著者のK大学での教職課程集中講義において、教育実習およびその後の教員生活に参考になる現場の実践報告をしてほしいとの依頼をうけた。

教職課程を履修する学生は、教員になる、ならないにかかわらず、教育実習という場面において授業を受ける側から授業を提供する側に立場が変わる。

そのことを踏まえ、ゲストティーチャーの立場で生徒指導・学級づくりと保健体育科の教材、いわゆる実技の指導法について3コマの授業を受け持ち、具体的事例をもとにして実践報告をした。

なお、ここでは「児童・生徒」を「子ども」と表現して話を進め行く。

実践報告の冒頭では、筆者の考える教育の営みを「子どもの資質や能力を引き出す行為」であると述べ、専門教科に閉じこもらず他教科へウイングを広げ、社会問題や政治など視野を広く持つことで、子どもとの良いかわりが格段に広がることを中心に話の構成を考えた。

実践報告後には、学生からアンケート形式での質問・意見、感想をとった。この項では、学生からのアンケートを通して、学生たちが教育実習をどのような受け止め、教育実習に臨もうとしているのかを理解する一資料としてまとめた。

その際、実践報告を受けた学生からのすべての質問等に対して一つひとつに対応し回答した。質問事項等を見ると、彼らの教育実習に対する不安や教職を目指すにあたり心得ておくべき事項を知りたがっている声が多く聞かれた。それに答える形で理論的と言うよりも体験から導き出した筆者なりの「解」を示し、彼らの教育実習に対する不安を和らげ、さらには教員としての自覚が持てる内容となるように意識して回答した。

1. 生徒指導分野（1コマ）

まず1コマ目の講義は、生徒指導についての講義である。前時にゲストティーチャーの紹介も兼ねて、学級の生徒が企てた「卒業式に今村先生を泣かせる」企画が報道機関を通じて放映された動画を視聴している。本人を目の前にして、教師と生徒との関係を探ることになる。

(1) 教員として心構えておきたいこと

①「教えること」と「育むこと」は教育の両輪

「教」とは「教科書（教材）『を』教える」と「教科書（教材）『で』教える」との違いを通して「教える」ことの意味を説明し、教材研究の基本的視点を示した。

また「育」とは子どもにイズム、つまり根拠に基づいた考えを持ち生きていく力をつけさせる、「生き方教育」の推進、未来の主権者を育成することであると持論を解説した。

②研ぎ澄ますは人権感覚

一つは、スポーツ（体育）は人権侵害を犯しやすい環境にあり、とくに体罰の弊害を力説した。また、スクール・セクシャル・ハラスメントについても説明し、加えてLGBTQへの理解が今の教育現場に強く求められていることも重要な問題として提起した。これらについて教壇に立つ者としての心得るべき事項も現実の場面を念頭に述べた。

子どもを傷つけないためには、「自分がされて嫌なことは他人にもしない」、「無知（不勉強）は差別（人権侵害）を生む」という考え方をしっかり持つことは、教壇に立つ者としての基本的姿勢であることも加えて説明した。

もう一点は、子どもの前で権力者として君臨しないことが、子どもが心を開いてくれる第一歩だと経験に基づく話をした。「若い教員は未完成であるがゆえに子どもにとって魅力がある」、未完成だからこそ子どもとの溝が埋められていることを貴重な財産として教壇に立って欲しいとの筆者の思いを伝えた。

③子どもを育てる教員集団の一員としての自覚

学校は様々なトラブルが起きる。ひとりではうまくいかないことも多い。また、教科指導にとどまらず生活指導、進路指導、道徳・学活、総合学習など教育活動は多岐にわたる。それゆえに、「同僚性、協力協働による組織としてのまとまりがとて重要である」、「自分だけ楽で安全な場所にいることは許されない。その自覚をしっかり持つことが社会人としても求められている」ことを学生には伝えた。

(2) 子どもとの関係をどう作り上げるか

①指導の基準を堅持

学級担任になったら、また教科担当として、自分の教育方針を明確に示す。仲間づくり、人権、対等・共生の視点などがその基本的事項になる。子どもとは同じ目線で対話し、些細なできごと（喜怒哀楽）にも真剣に向き合うことが子どものみならず保護者からの信頼を得ることにつながる。とくに問題行動の子どもとはコミュニケーションを大切にしかかわりを重視すべきと強調した。

②一人ひとりの子どもの生活背景への理解

子どもの背景にある生活を理解する。成育歴、家庭環境などに臨機応変に対応し、子どもの生活実態に応じた指導がとて重要である。

ほめることも生活指導には不可欠であり、「ほめる達人」の実践例を紹介した。このことを生活指導の中心にすえることで子どもが注意を素直に受け入れ、次のステップにつなげやすくなることを印象付けた。

③仲間づくりの視点

仲間づくりは学級づくりや授業でのグループ学習において大切であり、あらゆる教育活動の場面で、仲間を大切にすることを重視してきたことを学生には丁寧に説明した。

④子ども・保護者からの信頼

ぶれない、対応を中途半端に終わらせない、必要な時の家庭訪問、保護者・地域との関係づくりを基本姿勢に置き、『(子どもからの)先生への通信簿』の実践を紹介した。

⑤いじめ問題

いじめは現在の教育においてきわめて重要な課題である。このことを抜きにして学校・教育は語れない。いじめの訴えがあった、あるいは情報を得た場合の対処法の基本を説明し、さらに実践してきた内容として「自分一人で抱えない」、「子どもの助けも借りる」ことで解決に導けた例を紹介した。

⑥しょうがい児とのかかわり

しょうがい児教育には二つの流れがある。一つは「共生・共学」、もう一つは「発達保障」である。中心的に紹介したのは前者である。仲間づくりの視点からも「共生・共学」の理念の具現化をはかることで、しょうがい児との関係づくりを身近なものとして体験することが必要であることを強調した。しょうがい児は個性が多様である。それゆえに、しょうがい児教育と教育の原点に位置づけることができ、その教育を真に理解し実践することは、共生社会を実現する力を身につけることにつながることを力説した。

⑦「荒れた」子ども

「荒れる」子どもの背景は千差万別である。「荒れ」は暴力や喫煙など反社会的行動だけを指すのではなく、不登校・ひときもりも含めた子どもたちの心の問題を対象とした教育課題として位置付けていくべきとの視点を示し、「荒れた」子どもや不登校等の子どもを敵視しない、排除しない、放置しないことなどを重視し、実践例を紹介し、子どもと教員との関係を構築することが解決の秘訣である点を強調した。

2. 体育学習の具体的な実践報告（2コマ）

「印象に残る授業」の問いに回答した学生は、彼らの経験した「体育の授業」と比較しつつ受講する。またゲストティーチャーの教材研究の考え方に触れることで、授業と部活との違い（区別）にも気づいてほしい。

7・8・9時間の3コマの講義を終えて、10時間目はゲストティーチャーへの質問の時間を設けることとした。学生は付箋紙に質問事項を書き、3箇所の壁に貼る。それを大まかに分類（西迫・今村）し、回答をお願いした。さらにその後、最後にテーマを設定し「教育実習に対する不安など」について記述することを求めた。

教員と子どもとの関係づくりや子ども同士の関係づくりを土台にして、教科実践ではどのような視点で教材研究をし、それにより得た資料や教具等をどのように活用して授業を展開したかを伝えた。

教員の生命線は授業であり、授業を成立させる第一条件は教材研究である。これを疎かにすると子どもが関心を示す授業、わかる授業、つまり良い授業にはつながらない。学生にはこのことを強調して実践報告をした。教材研究の視点として、おおむね以下の8点を示した。

①単元で育てたい学力を十分検討する、②生徒の質問に的確に答えられるように教科書、副読本に出てくる用語や技術指導法等は入念にチェックしておく、③その単元（教材）の内容だけでなく関連する内容（他教科や身の回りの事象や時事問題・事件等）を調べる機会を意図的に作る、④基礎的・基本的知識を獲得させる教材、興味・関心を育てる教材、思考を深める教材などに分類する、⑤単元のねらいや生徒の実態に即した学習内容を取捨選択・加工する、⑥生徒の既有知識や経験、興味・関心を念頭に学習内容の配列、発問を作成する、⑦生徒が活動する場面を作るなど授業形態を工夫し、板書計画を立てる。⑧子どもの反応を予測し、その対応策を粘る。以上の8点が実際の単元でどのように生かされていたかを具体的な事例を提供し、学生に授業づくりの基礎となる内容を示した。

(1) 保健体育科の教育的位置づけ(教科の特質)をどうとらえるか

①体育も重要な教科のひとつ

教員は子どもたちに学力をつける責任がある。体育も例外ではない。体育の授業が間違っても体力づくりに偏ったり子どもの息抜きの時間（場）になってはいけない。

学力の考え方には達成的学力（教える学力）と形成的学力（育てる学力）があり、形成的学力は自然成長にも委ねないが、注入・教化すべきものでもない。この二つを子どもたちと教員の学習の交わりの中で意図的に設定する必要がある点を中心に説明した。

②技術認識・技術習得の一体化

体育学習ではよく「技術指導をしっかりすべし」といわれる。しかし、教え込み（鍛え込み）やカンやコツで技術が身についてもそれは単に「できた」で終わったことであって学力がついたとは言えない。子どもが「わかってできる」そして「分かち伝える」能力をつけることが重要である。そのためには授業形態として異質協働のグループ学習が必要となってくる。そうした活動を通して未来の主権者となりうる人格形成を期待できることを丁寧に説明した。

さらに保健体育を国語、社会、理科、算数などの教科と関連付けた応用（総合）教科として位置づけ、科学的に技術・技能を身に付けていくことも忘れてはならないことを強調した。

③体育学習に必要とされるスキル

思考スキル、コミュニケーションスキル、ICT（情報通信技術）スキル、数量的スキルなどが体育学習の目的を達成するためには必要であると解説した。

そして、学習場面で子どもたちがラップタイムやボールの軌跡などのデータを取りながら学習を進めていくことを重視して授業を組み立ててきた実践例を詳しく紹介した。

以上の点を前段で踏まえ、陸上球技、器械運動、球技などの教材ではどのような実践をしてきたかを具体的に図や資料を駆使して報告した。

(2) 教材ごとの実践例

以下、教材ごとに箇条書きにして示す。

①短距離走の学習

- ア. グループ学習の導入⇒異質協働の学習集団
- イ. データ収集を重視した学習の機会⇒「タイムとり」の学習に終わらない
- ウ. 実験的授業の追及 仮説⇒実施（データ収集）⇒分析・検証⇒集団思考
- エ. 分析を可能とする記録用紙（学習カード）の工夫・準備
- オ. 先行実践としての8秒間走から「しっぽ走」の導入
- カ. スタートダッシュから中間疾走へのスピード変化（10mごとのラップタイムとスピード曲線）を調べる実験的学習
- キ. 「ぴったんこレース」による競争の質を問う学習

②バスケットボールの学習

- ア. バスケットボールの特質はなにか
- イ. 歴史認識... バックボードの歴史、創世期のバスケットボールを体験（歴史の追体験）
- ウ. ゲーム中のパス・キャッチ、シュート、ドリブルなどの回数やボールの軌跡を学習カードに記録
- エ. グループによる記録をもとにした検討、分析、作戦会議

③マット運動

- ア. マット運動の基礎技術を「側方倒立回転」と位置づけ
- イ. 手形、足形による技術分析と個人の課題の明確化
- ウ. 個人演技から集団演技へ（男子新体操の演技）
- エ. 演技の鑑賞力の育成（ビデオ視聴から演技の採点をする）
- オ. 技の構成と採点の視点を考える（採点基準を学ぶ）

IV. アンケート内容の整理

10時間目終了後、次の講義は約1ヶ月後である。その期間にゲストティーチャーは、上記のアンケートに対して、学生へ語りかける文体で20ページに及ぶ回答集を作成していただいた。以下にその回答の一部を紹介する。11時間目はこの回答集をもとに講義をスタートすることとした。

学生（N=87）からのアンケートを要素ごとに7つに分類・整理した。ここでは、要素ごとに若干の解説を加える。

なお、一人で複数の質問や意見を出している学生もいるため各項目の人数のトータルはN = 87を超える。

(1) 子どもとの関係づくり（15人：23%）

教育実習に際し、自分が生徒にどう思われるか、生徒になめられないか、指導ができるか、教員という立場で生徒との関係が持てるかなどの漠然とした不安を抱く学生

が意外に多いことが示された。

- (2) 授業に集中のさせ方、運動の苦手な子どもへの対応 (5人：6%)

授業に集中しない、話を聞かない、つまらなくしている生徒へのかかわりや運動の苦手な子どもとのかかわり方や指導法など具体的な対処法を求めている問いが寄せられた。

- (3) 話術、話のネタ (18人：21%)

人前で話すのが苦手、生徒の前で堂々と話すことができるか、話をうまくまとめるコツ、話の締めくくり方、さらには話のネタはどうしているか、生徒指導の視点から聞き上手になる方法、子どもたちとどんな話をしてきたかなどの具体的な対応や対策を知りたがっている学生がここでも多くみられた。

- (4) 指導計画、授業づくり、指導技術と工夫、指導案 (25人：29%)

授業をうまくやっていけるか、良い授業を生徒に提供するうえで大切なこと、指導案作成や指導案通り進められるかなど、授業の進め方が予測できずに困惑している様子が伺えた。また体験の少ない種目、苦手な種目の克服の方法や授業づくりのアイデア、どのような工夫をすべきかなど教材研究の視点を求める声も多いことが示された。

さらにどうすれば記憶に残る授業ができるかと前向きにとらえる意見もあった。

- (5) 生活指導、体罰、いじめ、保護者との関係 (9人：10%)

生活指導上のトラブルの兆候を見逃がしたとき、想定外の事態への対処、いじめ、クラスのまとまりがないときの対処法など現代の教育が抱える諸問題、集団づくりの視点をもっと詳しく知りたいとの質問があった。また体罰についての是非を問う声もあった。生活指導に関心を示す学生がいることも浮き彫りとなった。

なお、学校行事、生徒会活動、学級会活動などの生活指導以外の生徒指導についての質問は全くなかった。

- (6) 教員のやりがいやよい教員の条件、教員像 (24人：28%)

教員としてのやりがいとは何か、良い教師の条件、教員としての素質、能力、それを効率良く身につける方法を求めていることも明らかとなった。それを理解したうえで、自分が教員にむいているかを見極めを判断したいとの声もあった。

また、教育実習を前に自信のなさを嘆く意見が散見された。

- (7) 教員間の交流、長時間労働・多忙化、その他 (12人：14%)

教員になった場合、他の教員とどのようにかかわっていくか、教育実習先の先生に迷惑をかけないか、うまくコミュニケーションがとれるかなど、漠然とした不安を持つ意見があった。

また学校は飲み会が多いのか、自由な時間が持てるかという自分の時間を奪われることへの疑問視する声も少数あった。

2019年12月 鹿屋体育大学 西迫「教育方法・技術」講義

教育実習・教員になることへの不安や悩み等のアンケート回答

回答者：今村久雄

多くのご質問いただき、ありがとうございます。

回答するにあたり、おことわりしておきたいことがあります。

私と受講者のみなさんとは初対面であり、ましてや会話をしたこともありません。皆さん一人ひとりがどんな考えを持ち、どんな生活を送ってきたか、いま、どんな生活を送っているのかなど、まったく分かりません。したがって、回答は一般論になってしまう傾向が強いと思います。

また、回答は私の経験や私見によるところも多くあります。お伝えしたことが必ずしも正解とは言えませんし、現状認識をお伝えするだけの回答になっている内容もあります。

さらに、質問意図とは違うニュアンスの回答をしている部分もあるでしょう。

参考にして読んでください。

加えて、すべての質問への回答ができていないこともお詫びします。

(例)

2、授業に集中させ方、運動の苦手な子どもへの対応の質問

(2) 運動の苦手な子どものかかわり方

数学が苦手、英語学が苦手の子がいるように体育が苦手という子どもも当然います。体育の場合、ちょっと厄介なのはその苦手な状態が目立つという点です。体育は身体活動ですので、どうしても周囲に自分の動きの鈍さを直接見られることとなります。その結果、他の教科以上に対象の子どもは自尊心を傷つけられかねない状況になってしまいます。

体育が苦手な子どもには無理強いすることは避けましょう。対象の子どもには「少しでもで上達するようにゆっくりとりくもう」と語りかけ授業を進めましょう。できるようになるためのスモールステップを準備し、対象の子どもに提示して授業を進めていくことが必要です。小さな進歩を見逃がさず必ず評価して自信をつけてあげましょう。練習の場面では技能の優れた子どもの協力ももらうことも有効です。

体育の学習は各教材(種目)の技術習得だけに目標を定めては体育嫌いの子どもをさらに追い詰め、ややもすると体育嫌いの子どもをさらに増やす結果になります。それを避けるには、体育学習において技術指導と同列に技術認識という「技術習得の道筋を科学的に理解・認識する」知的活動を配置することです。その知的活動は、思考スキル、コミュニケーションスキル、ICTスキル(情報通信技術)、数量的スキルなどが考えられ、内容は多岐にわたります。体育学習の活動内容に技術習得のみを配置せず、上記の内容を学習活動にちりばめることで、「体力、運動神経では劣るけど○○スキルは私に任せて」と運動が苦手な子どもの出番の機会を増やすことにつなげることができます。そして、そのことで周囲の子どもの学力も高まっていくことが期待されます。

付け加えるなら、私は体育の授業を持ちながら数学、理科、美術などを担当した経験が多々あります。したがって、体育の時間には見せない子どもの表情や行動を見る機会に恵まれました。そのことで、子どもを多面的に見ることができ、体育の授業でも様々な角度から子どもに接することができ、そのことで子どものやる気を引き出すことができたように思います。

V 学生の質問・意見、感想からの考察

11回目授業記録には「ゲストティーチャーの回答集」に対する、学生の感想が残されている。本稿をまとめるにあたり、ゲストティーチャー自身の考察をお願いした。

10回目の計画に急遽取り入れたアンケートであったが⁸、筆者自身が意図した以上に「回答集」に対する学生の反応が良いことに驚いた。1ヶ月後の講義再開ではあったが、講義の振り返りにも効果的である。ここからが筆者の講義展開の力量が問われることとなる。それまでに参考文献⁸を用いて講義方式で実施したことに加えて、グループワーク⁹を取り入れる。

8 参考文献として主に用いた文献は、①田中耕治編(2012)『よくわかる教育課程』ミネルヴァ書房であるが、発刊予定の②吉田武男監修 樋口直弘編著(2019)『教育の方法と技術』情報紹介

9 3・4時間目の非言語的ワークショップに加えて、演劇脚本をグループ毎に読み合わせ練習をした後、各グループ毎に発表する。さらに最も関係性が伝わったグループについての批評を交流。「人前で話すこと」への苦手意識を持っている学生にとって「声を出すこと」を促す意図である。

学生からのアンケートに対し、それに一つひとつに回答した。さらに回答に対する学生の感想を聞いた（11回目の授業記録より）。

学生からのアンケートや感想を検討した結果、次の5点に整理できた。

- ① 現場の具体的な事例や解決策の提示は学生の不安緩和・解消につながる
- ② 学校現場の具体的事例を知ることで授業の風景、教師像をより具体的に描ける
- ③ 教育に携わることへの希望、教育実習に対する責任意識を高められる
- ④ 現場教員の苦悩やつまずきを知り、それに対する解決法を理解できる
- ⑤ 現場教員の一つ一つの言葉や実践は説得力を持ち理論の裏付けとなる

以上の5点に整理した事項について、総論的に学生の声を引用（ママ）しながら私見を述べることにする。

まず言えることは、教育実習に向けて希望というよりも不安を抱えている学生が大半を占めていることが判明した。

学生が抱く不安を分類すると①「子どもとの関係づくり」、「生徒指導」といった子どもとのコミュニケーション・信頼関連と②「指導技術、授業の工夫」、「話術、話のネタ」といった授業づくり関連の2つに大別できる。

①の子どもとの関係づくりについては、「生徒とどのように接しているのか」、「生徒にどう思われるか」といった漠然とした不安も含め、生徒との接し方を知りたいがっている声が多くみられた。その中でも「生徒指導をするにあたって最も意識していること、最も重要なこと」をより具体的に知りたいとする声が多かった。

②の授業づくりにおいては、どんな準備をすれば授業で失敗しないか、よい授業をするにはどんな点に注意していけばよいかなどといった声が多くみられた。

学生が教育実習先の教壇に立ち実際に生徒と交流していけば、それまで抱いていた不安や気負いは杞憂であるとはわかるはずである。ただ現実問題として教職課程の講義の内容に教育実習に対する学生の不安や迷いを緩和・解消させ得る項目を盛り込むことが可能かと言えばそれは保障しえないであろう。それを補完するために現場実践の具体事例を紹介できるゲストティーチャーの存在が必要となる。

ゲストティーチャーの実践例を参考にして、学生が教育実習先で対面する子どもたちの声に丁寧に耳を傾け、自分なりの考えや思いをしっかりと返していく、あるいはその姿勢を示していく、そのことで子どもとの関係は築けるのだということを学んでくれると期待する。

生徒指導の最終目標は、生徒が自立して生きていける道筋をつけ、未来の展望を拓いてあげることである。一般的に生徒指導においては「指導のマニュアル」を求める声も多いものだが、今回のアンケートからはそれはごく少数であった。

生徒指導は子どものおかれている様々な状況下で対応していかなければならない。子どもの成育歴、家庭環境、経済格差と学力差の問題など、あるいは喫煙や暴力行為、無免許運転等反社会的行為に走る子どものかかわり方などといったものが想定される。基本は生徒の抱える現実、思いを受け止めることである。このことを経験値の少ない学生に十分な理解を求めるのは無理がある。学生の感想を読む限りにおいて、現場教員の実践を伴った具体的な事例や指導法は学生にとって貴重な財産となったと自負する。

教職課程を履修する学生の講義において、生徒指導分野に関わって、研究者がどれだけ「子どもたちの現実を知り、現場の教員の苦勞・苦悩の実態を理解しているのか」、そのことを抜きにしての生徒指導論は単なる理論的内容に過ぎず、学生には机上の空論に受け止められかねない。

学生の感想からも、「現場を経験した人でなければわからないことがたくさん書いてあったためになった」、「教育実習に行くにあたり不安に思っていた事は現場の先生の話から具体的なことがわかり参考になり不安が取り除かれた」、「教育実習に対して不安から喜びに変わった」、「アンケート回答を読んでとても納得した。細かく書いてあってわかりやすかった」、「回答はどれもなるほどと思えるものばかりで今後教師を目指すにあたり非常に必要なところだと思った」との声が聞かれた。

また、筆者の失敗談を紹介したことに触れ、「失敗はだれでもする。失敗は成功のもとだと（思えて）自信が持てた」、「他人の前で話すことの苦手な自分に教育実習が務まるのか不安があったが、場数を踏んだ教師でも緊張することは多いと聞き、不安が取り除けた」、「ほかの人（学生）の質問も読んでとても勉強になった。不安が自分だけでないことが分かり安心した」という「不安の共有化」が図られ「安心・希望」への橋渡しになったこともアンケートの一つひとつ丁寧に答えていった成果であろう。

教育実習をむかえるにあたり、学生が求めていることは具体事例であり、試行錯誤しながら生徒との関係を作り上げてきた現場教員の生の声を伝えることが重要であると断言できる。

さらに、現場で培った対話のテクニック、指導技術等によって課題を持つ生徒が変容した事例を伝えることで、「現場教師の話聞いて先生になりたい、教師になっていいなと強く感じられるような内容であった」という声のように、学生の意識に影響を与え、学生に教育に対する「ある種のロマンを描かせる」¹⁰効果があると確信した。

学校は「ブラック企業」ととらえられる時世にあって、「教育・教師に対しての若い者のきつい仕事からやりがいのある仕事と言うふうに考えを変えることができた」、「現場教師の話聞いてこれまで自分が描いていた教師像が変わった。マイナスイメージがプラスイメージに自分の認識が大きく変わった」、「教師になっていくにはどんなことが必要なのか考えるきっかけになった」と教職・教育実習に対するイメージが正のスパイラルを描いていっているようにも感じた。

結論付けるなら、教育実習をむかえるにあたり、学生が現場教員の教育実践の具体的に触れることにより、学生の心理的な部分と授業づくりにおいて何を準備すべきかをイメージさせモチベーションを高めることにつながるということになるであろう。

10 「ある種のロマンを描かせる」というフレーズについての議論をおこない、筆者の表現のままとすることにした。今村教育実践が単に「教科教育」のみに焦点をおいているのではなく教育実践を「教科外」も含めトータルな視点で実践をかさねてきた結果、生み立されたフレーズである。学生たちにむけて、「希望や展望」をもってもらいたいという願いを強くあらわしている。

VI 「やってみたいこんな授業案（教科・教科外）」作成まで

最後は各自「やってみたい授業案」を作成する。その際の条件は以下の通りである。

①目的が設定されていること、②対象者の設定 ③人数 ④授業者はあなた自身であること ⑤内容：使用する教材（スポーツ種目など）⑥事前の準備など ⑦授業時間は30分～50分（時間の経過） また配布した用紙項目には、①～⑦項目を挿入した表を示した。

グループ内で案を発表し合い、質問や意見を受ける。さらにグループの意見を取り入れ修正する。グループの代表者（案作成者）が全員の前で発表して集中講義は終了した。

表4・5は15回目で選ばれた案ではない。改めて授業記録から、筆者とゲストティーチャーで抽出したものである。単元、細案と略案の例はゲストティーチャーの講義資料で示めされているが、形式的完成度を強調せず、「やってみたい授業」としている意図は、学習者から指導者への転換を強要することを避けたいためである。

表4 やってみたいこんな授業 略案A 授業対象者（高校生30名）

教材	保健体育 スマートフォン症候群	本時	総時間 (50)分
目標	スマートフォンの使い過ぎによる恐怖を植え付け、生徒自身で今の生活を見直してもらうことを目標とする		
過程	学習活動	時間	指導上の留意点
導入	スマートフォンをだいたい何時間見ているのか？何時ごろから持っているのか？スマホの良いところ、悪いところをグループで話し合い発表をしてもらう	10分	話し合いにしっかりと参加する
スマートフォン症候群	スマホが体に及ぼす影響について「スマートフォン症候群」とは？スマホ長時間→肩こり、腱鞘炎、眼精疲労、視力低下、ドライアイなどの症状の総称	20分	①スマホの悪影響は何もないだろうという間違った情報・概念をなくす ②スマホ肘やスマホ巻き肩（猫背、肩こりの原因）など変わった悪影響を伝える
その他のデメリット（バルサルバ網膜症）	・スマホがないと不安→スマホ依存 ・スマホを見すぎると目が破裂する→網膜からの出血→視力の低下（バルサルバ網膜症） ・見過ぎ→不眠症→血流悪化→血管に負担・破裂（バルサルバ症候群） ・その他のデメリット 歩きスマホ・ながらスマホ→事故 ・詐欺、ネットいじめ→自殺	15分	事故件数（1年間）、ネットいじめ事例を話す
まとめ	感想	5分	

表4は保健体育授業で昨今話題のスマートフォン症候群の授業案である。目標の「～目標を植付け」という表記には修正を加えたいところではあるが、時事の問題への関心を授業してみたいという点において、教材研究のための情報収集への視点が評価できる。もしかしたら本人の問題であるのかもしれないともうかがえる。つまり、日常生活から健康を考えることがのちの教材研究につながる。

表5はバレーボール教材で、抽出の理由は目標設定である。「カバーしあいながらパスからのトスの一連の流れをつくり」とカバーリングへの着目はバレーボール技術を要素的に捉えるのではなく、パスをつなぐことの重要性を言い当てている。一連のつながりから「攻撃を交えたラリーの見られるゲームの創造とゲームの管理・運営ができる」設定から

B案作成の学生の専門競技であろう。スポーツ教材の特質の把握ができていることがわかる。但し学習活動の流れは一応の計画を書き入れているが、中学生の実態から考えると通常の授業ではなかなか難しいとも思える。時間配分についても曖昧である。「苦手な子ども」への対応が教育実習では課題になるであろう。多くの学生が自身の専門競技を取り上げているが、その得意な種目を足がかりに他の教材への準備も必要であろう。

表 5 やってみたいこんな授業 略案 B 授業対象者（中学生 30名）

教材	バレーボール	本時	総時間（9）時間（5）時間目
目標	カバーしあいながらバスからのトスの一連の流れをつくり、攻撃を交えたラリーの見られるゲームの創造とゲームの管理・運営ができることを目標とする		
過程	学習活動	時間	指導上の留意点
1	グループで準備運動ができる	5分	不足する準備運動があればアドバイスする
2	挨拶をして健康観察を受ける		
3	本時の課題を確認する ①カバーリングの重要性を知り、バスからの流れを意図的に作り出すことができる ②審判などゲームの運営ができ、カバーリングを生かしたゲーム展開が行うことができる		
4	カバーリングの意義や仕方を確認する	10分	ビデオなど観て自分の動きを確認する
5	パス・トスの練習を行う	↓	
6	空間認識を鍛えるためにアタックやレシーブの練習をする	10分	
7	サーブの練習を行う		
8	ゲームを行う		
9	まとめ 反省		ケガ人有無の確認

Ⅶ 成果と課題

ゲストティーチャーへの質問の分析からもわかるように、「授業」に自分の競技経験をそのまま導入することはむずかしいという予感が不安に表れている。ゲストティーチャーの考察から以下の5つの成果が示された。

- ① 現場の具体的な事例や解決策の提示は学生の不安緩和・解消につながる
- ② 学校現場の具体的な事例を知ることで授業の風景、教師像をより具体的に描ける
- ③ 教育に携わることへの希望、教育実習に対する責任意識を高められる
- ④ 現場教員の苦悩やつまずきを知り、それに対する解決法を理解できる
- ⑤ 現場教員の一つ一つの言葉や実践は説得力を持ち理論の裏付けとなる

筆者は教職課程科目を担当するにあたり、ゲストティーチャーの導入によって、教育実習前にその具体的なイメージを学生が持つことができたという大きな成果を確信しているし、100名弱、集中講義という条件下でも「グループワーク」までたどり着くことができた。ゲストティーチャー（第二著者）には自身の教師生活をトータルに伝えていただけたことに感謝する。上記5つの成果について同感である。

学生は教員免許取得のための科目履修と教師になるという意味について、強く意識され、「児童・生徒」時代の学校・教師の印象と往還しつつ、「不安」を率直にゲストティー

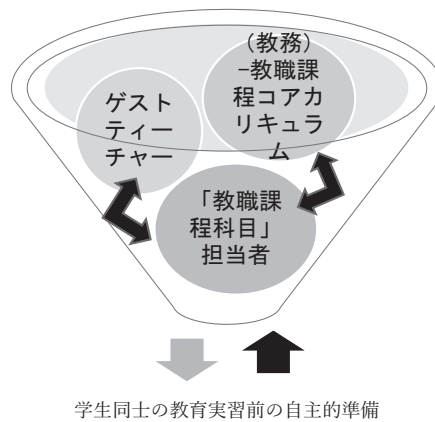
チャーにぶつけた。「回答集」を手にした学生は、自分以外の質問も含めて共有することができる。「不安を持っているのは自分だけではない」という確認から安心と今後の準備期間の課題を明確にするツールとしても機能する可能性を生み出している。

履修学生は、教育実習までの猶予期間は早くても半年後、遅いものは一年半後となる（2年次以上履修可能）。残念ながら筆者がその間のサポートを適時対応することは不可能である。本科目以外の教職課程科目履修者同士の交流が深まる機会が作れないだろうか。これは、ゲストティーチャーから投げかけられた大学教員との役割分担のあり方についての課題である。

2018年、2019年の2年間、担当させていただいたが、教務課を通じて「できれば専任教員が担当していただける」ことが重要であることを申し上げてきた。幸いなことに2020年からは「教育方法・技術」「生活指導論」を専任教員が担当いただける準備が整ったとのことである。2019年後半の講義15回全てに次年度より担当する先生が全ての講義に参加及びアシストをしていただいた。講義担当者とゲストティーチャーと専任教職課程科目担当者3名で展開の修正について打ち合わせをする時間も設けることができたのである。

図に示す関係図は、講義の連携を示す。ゲストティーチャーとの連携の成果が、今後学生からの教職課程科目へのモチベーションが高まり、「教育実習までの課題」をさらに学生ら自身が発見するサイクルへと発展することを期待したい。

図2 教職課程コアカリキュラムプランと担当の連携



謝辞

鹿屋体育大学教務課職員はじめ、栗山康弘講師には講義参観及びアシストをいただきました。記してお礼を申し上げます。また貴大学においてはゲストティーチャーとしてその後も今村氏との連携を継続いただいております。教職課程コアカリキュラムの更なる発展を期待しております。

